

本当に疲れている時に聴く、のじやもふ妖狐の千歳さん

クアトロ

## ■作品概要

△サークル△

癒し庵もち猫（シナリオ／効果音／音声編集：クアトロ）

△ジャンル／年齢指定△

バイノーラル音声作品／全年齢

△作品ボリューム△

90m △口語文字数11,477文字

△舞台△

現代の日本△とある山中、神社の本殿

## ■登場人物

△ヒロイン△

名前 .. 千歳（ちとせ）／1000歳）一人称..「ワシ」／一人称..「おぬし」  
人物 .. 稲荷神社に祀られている白狐／見た目は二十代中頃

足しげく通り聽き手をとある事情から呼び止める

至って眞面目／母親の様な包容力がある

身長160センチ／B89W55H90(Fカップ)

△聴き手△

社会人 .. 疲れ切ったサラリーマン（25歳）

# 1：千歳との出会い（神社の参道／夜）1,095文字

（虫の鳴き声／林の環境音）

（聴き手の足音／とぼとぼ）

（左右から鈴の音）

（位置右・距離普通／有聲音／やや小声）

おこ、ルリのお声（ぬし）……上あれ……。

ルリジヤ、ね主じや…。

（位置左・距離近い／無聲音／小声）

おっと、驚かせてしもつたかの？

すまぬすまぬ。

（位置正面・距離普通／有聲音／やや小声）

ワシの姿が見えぬのでは、驚くのも無理はなかろう。今見える容（かたち）として顕現するでの。

待つておれ。

（左右から鈴の音）

（位置正面・距離普通／有聲音／やや小声）

ほれ、これでどうじや、見えたかの？  
うん？

なんじや、狐に摘まれた様な顔をしおつて。  
まあどうなるのも無理もないか。

虚空（くうくう）から突如、姿が顯わになつたのじゃからな。

ワシか？

あ～、ど～から説明したらよいか…。

ワシはこの神社に祀られておる白狐（びやっこ）じゃ。

おお、いい反応じや～。

そうでなくては姿を現した甲斐がないでの。

名を千歳 (ひといせ) と申す。

御年千歳じや。

ああ……こわゆる妖狐 (よつね) 、(けいし) つかひじやな。

うむ、昔話なげておへりておるの、じや。せうへんへんへんの、じや。

ふわふわ大好きな耳へ

もうもらの尾 (お) へ

かひつと申びぬまへ

(**田嶋風**) ふふそひへ

「ひづや」それでワシが妖狐である、お主にも近づいたかの?

なに、言ひれぬじやとへ

ふ~む、どしたものか…。

なりがいじつみつ。

ワシが姿を現した訳を聞けば、言ひてはれるかの?

うむ、では聞こ聞へぬ。

お主、連日 (の) 社 (やしろ) を訪れておるじゃあるまいへ。

元より熱心な参拝者 (じや) と関心しておつてな。

そんな者の願いを聞かぬ訳にはいかぬ。

じゃから願いをさせてやひつと想つとおんじや。

ナーデジや、お主の願いを……あ~。

待て待て、ワシは神の遣い。

神通力があるので。

尋ねずとも、お見通しじや。

お主は……ふむ……余程の心労を抱えておる様じやな。

そして心の安らぎを求める、毎日 (の) を訪れておる……。

じやじや?

(**田嶋風**) ふふそひへ

「いつたじやん。

「」の程度、「」は容易（たやすく）♪  
セイジでじゅ。

ワシがその心労を取り払つてやる。  
ん、なにをポカンとしてね。

「いつたじやん？」

願いを叶えてやる、と。

どうじや、少し寄つては行かぬか?  
なんじや、警戒しておる様じやな。  
なりませいへつよひ。

緊張をほぐす、おじなこをかけてやれり。  
お主、セイジで田を閑じてみい。

襲つたりせよから、ほれ、早（はよ）いせい。

（位置左・距離近い／無聲音）

（弱く息を吸う音）すう…。

（耳ふー）ふー、ふー。

「れ、動くでない。

（耳ふー）ふー、ふー。

（位置右・距離近い／無聲音）

（弱く息を吸う音）すう…。

「いかにもじゅ。

（耳ふー）ふーふー。

（耳ふー）ふー、ふー。

（位置右・距離近い／有聲音／かなり小声）

「」にひいてくれば、「」した事をこいつでもひとつやねん。

お、どうやら心が揺さぶ始めた様じやな。

(歯ぐ様に) もひわと思つじや。

(位置左・距離近い／無聲音)

(弱く息を吸う音) あう…。

(耳にせーと息を吹く) せー、せー。

(耳ふーはー) ふーせー、ふーせー。

(位置右・距離近い／無聲音)

(弱く息を吸う音) あう…。

(耳はー) はー、はー。

(耳はー) せつせー、せつせー。

(位置右・距離近い／有聲音／かなり小声)

どつづじや、心の氣になつたかの?

せつかせつか。

せつ来なくては面白うない。

でせねむ、ぬうと決まれば早(せよ) いぢぐれ。

「え」、「じゅ」と。

野暮な事を聞くでない。

「」の様な参道の真ん中では落ち着かぬじやう。

じやから「」の根城、本殿(ほんでん)へ案内してやる。

つこに参れ。

(鈴の音)

(鷺や手の呪音)

2：お清め耳拭き（神社の本殿／夜）1,294文字

(位置左・距離普通／有聲音／小声)

どつづじや、「」の根城は。

静かでよこ所じやへ。

(位置正面・距離普通／有声音／小声)

そつか、気に入つたか♪

最近は夜（よる）も暑く、寝苦しい日が続いてゐる。  
セレでじゅ。

水を絞つた布巾で耳を拭き、涼んではみぬか?  
察するにお主、まだ警戒を解いておひぬじゅわ。  
やはりな。

囁つたじゅわ。

お主の心は見透かしておる、と。

動搖しておる事もお見通じじゃ。

じゃからその緊張を解くため、耳拭きをあらへ。  
ほれお主、そんな所に立つてこては拭けぬじゅわ。  
近（ちい）い寄りぬか。

（聴き手の足音）

（位置正面・距離近い／有声音／小声）

うむ、ではセレに座るがよ。

（聴き手が床に座る音）

（桶に入った水の音）

では早速、清めの水を絞つた布巾で拭いてゆくぞ。

（左右交互に耳拭き音）

（位置正面・距離近い／有声音／かなり小声）

「の社はな、取り廻んでおる日々も含めて神域なんぢや。  
その口から湧き出たのが、この水、清めの水じや。

邪氣や穢れを祓つものとして、これより優れたものはないじゅわ。  
どうじや、冷たくて、心地よくはないか?

セレじゅわじゅわじゅわじゅわ。

今宵も過ぎしにへり暑ヤ。

しかもお主は疲れ切つておる。

それでは寝付けまいて。

じやから、一匁して冷えた布巾で涼を取る…。

時間や田頃の疲労も忘れ、ワシに身を委ねるがよい…。

大丈夫じゃ。

お主を邪魔するものなど、今はい。

言つたじやうつ?

こゝはワシの根城。

邪氣も穢れも入つては来れぬ。

全身の力を抜き…ただただ悠然と…。

(しづらぐ布巾で耳を拭く音)

(弱く息を吸う音) すう…。

今度は両方の耳を、同時に拭いてゆくからうの。

(布巾を濡らし、絞る音)

(しづらぐ布巾で両耳を拭く音)

(位置正面・距離近い／有声音／かなり小声)

(弱く息を吸う音) すう…。

なあお主…そのまま楽にして聴いておれ…。

お主は少々、頑張り過ぎる所があるの。

なあに不思議そつな顔をしておる。

言つたじやろ、神通力じゃ。

勤め先へ向かう道中での人混み。

勤め先での人間関係。

自宅へ帰ったとて道楽にいそしむ余地もない。

旦頃の疲れ、少しは取れたか？

そつか、なうばよこへ。

先程よりも顔色が色づいておる。

淀んでいた血の巡りが、よくなつた謂じやふ。  
ではもう少し、耳拭きを続ける。

(しづらべ布巾で両耳を拭く音)

(位置正面・距離近い／有声音／かなり小声／ゆっくり)

(弱く息を吸う音) すう…。

この神域で湧いた清めの水で、邪氣や穢れ、疲れを祓つておる。  
お主は今、この神域と一体化しておると言つても、過言ではない。

山の息吹…。

木々の搖りや…。

川のせせりや…。

川はやがて大海へと通じ…そして畠となり…また山へ巡る…。  
歳月をかけ…幾多も幾多も巡り…循環しておるのでじや…。  
そこにはお主、人間もまた含まれておる。

自然の環（わ）。

命の環。

その環ひとつで、ワシやお主はひまほひまなもののじや…。  
ああねつじや。

妖狐であるワシドヤシ、じや。

じゃがな、その内の何か一つ欠けぬといつなんへ…。  
ねつじや…。

環は途切れ…途絶え…歪みが生ずる…。

その歪み…じや、邪氣や穢れに隙をぬくのじや…。

ワシは長く生きておるから…。

その様な歪みを、數え切れぬ程見てきた…。

その度に…歪みを正しておるんぢや…。

色々な歪みを正してきたの'。

時には山々を削る様な豪雨から…。

時には水不足による干ばつから…。

時には不作による飢餓から…。

今回は…わ、お主じや…。

うん、なんじや?

ふふつ。

礼なれりや。

これが神の遣いたる、ワシの使命じゃから。それにな…あいや、この話はやめておくとこよ。とにかく、お主には英氣を養い、帰つてもむか。

覚悟しておれ。

(じぎり／布中で両耳を拭く音)

(位置正面・距離近い／有声音／かなり小声)

(弱く息を吸う音) すう…。

(小声く頷く様に) うむ。

そりやうよこじやう。

じつじや、お主も満足したかの?

そつかそつか。

なうばよこ。

3：特別な耳かき（神社の本殿／夜）3,110文字

（位置正面・距離近い／有声音／かなり小声）

では次じやふ

なんじや、ポカンと口を開けおつて。

「轟みを止め。」

「轟みを止め」と。

分からぬか？

まだ足りぬと轟ひを止め。

「うむ。

それ程、お生の轟みは深刻じや。

「いや、」されじやふ

お生もよつ見知つておぬじやひへ。

「わ、耳かき棒じやふ

じゃがな、「の耳かき棒とは訳が違ひ。  
どうじう事か、知りたいか？」

（血漫仮に）「うそひへ

では教えてやむひへ

」の耳かき棒はな、」の社の「神木からでさしておぬのじや。

安心せい。

切り倒してしまつた訳ではない。

いかなる木々とし、枝葉は落ちぬもの。

「わして落ちた枝を削り、でさしたのが」「れじや。

秘めたる力が備わつておぬ、「神木から成る耳かき棒…。  
どうじや、特別じやひへ

（血漫仮に）「うそひへ、感心しておぬの感心しておぬひへ。

ではな、早速耳を覗かせてやむひへ。

なこ」を保けておる。

その体勢では耳かきがでもじやない。  
じやからほれ、ワシの膝へ」こ。

なあに、構わぬ。

なんせ「特別な耳かき」、じやからのふ。

特別に、ワシの膝を貰つてやひつと三つておる。

ほれほれ、早（はよ）いせぬか。

（千歳の膝に寝転がる音）

（位置右・距離近い／有聲音／かなり小声）

じひじや、ワシの太ももせ？

柔らかくて、滑らかで、心地よこじやひふ

（嬉しそうに） うつかねうかふ

ではの、耳かき、やつてこいつかのふ

うん、なんじや？

ははんふ

じつ暗（くろい）うちはよひ見えぬ……と暗（くろい）のじやひへ。

（血饌） ふふそひふ

お母、忘れておりぬか？

ワシが妖狐じやと。

狐はな、夜田が利くのじやひふ

じやから、陽が落ちた今も尚、もおく見えておるとこつ聞じや。

お母の耳の中も、せつせつ見えておるひふ

安心して身を委ねぬがよこ。

では…やつておらべ…。

（耳かき音）

じひじや、特別な感じ、すみかの~.

(血漫氣) フフニッ、ハハハハハハハハハハハハ

では続けてゆくぞ…。

### (じばくう耳かき音)

(浅い鼻呼吸音／時折短い呟く様な台詞)

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。  
すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

(弱く息を吸う音) すう…。

んつ…んんつ…よしよし…。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

(弱く息を吸う音) すう…。

んつ…ふむ…ふふつ♪

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

(弱く息を吸う音) すう…。

痛くはないかの?

そうか♪

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

(弱く息を吸う音) すう…。

もう少し……よし…取れた取れた♪

(「」まで)

(位置右・距離近い／有聲音／かなり小声)

ふふつ、お井、口が開いておねり。

それほど心地よかつたのじやな♪

ああ、そのままですよ。さ。

縮「まつてしまつては、肩に力が入つてしまつでの。

うむ。

今宵はお主をと「ん甘やかすのじや。

お、察しがいいの♪

わづじや、耳かきで終わりではない。

覚悟しておれ♪

ヤヒヤヒ、詰はしまじゅじや。

続ヤをしてゆくべ。

(じぎりく耳かき音)

(浅い鼻呼吸音／時折短い呴く様な台詞)

す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。

(弱く息を吸う音) すう…。

ふむ、これは中々…大物じやな…よし♪  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。

(弱く息を吸う音) すう…。

うん？

んんつ……ふふつ♪

す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。

す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。

す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。

す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。

(イイ)まど

(弱く息を吸う音) すう…。

よし、もう立った汚れはないの。

仕上げに梵天じゃ♪

うん、なんじや？

おお、気付いておったか。

うむ、この耳かき棒には梵天が付いておうぬ。

なうばり♪♪、じゅ♪

ほれ、ワシの尾（お）で綺麗にしておぐわ♪

なんじや、いつも身構えるじゃない。

それとも、ワシの尾では嫌かの？

ふわふわじやぞ？

もうもうじやぞ？

ほれ。

(耳に尾の先が当たる感じの音)

ほれほれ♪

(耳に尾の先が当たる感じの音)

ふふつ♪

じつやう辛抱堪りませんじやの♪

ないぜ参へん…。

ふ～わ、ふ～わ、も～ふ、も～ふ。  
ふ～わ、ふ～わ、も～ふ、も～ふ。

お主、耳にふ～ふと息を吹きかけぬで。

ふふつ♪

お待ちかねの、じや♪

(耳ふー) ふ～～。

これ、そつ動くでない。

束の間、ジツとしておれ。

(耳ふー) ふつふ～、ふつふ～。

ふ～わ、ふ～わ、も～ふ、も～ふ。

ふ～わ、ふ～わ、も～ふ、も～ふ。

(耳ふー) ふ～、ふ～。

(位置右・距離近い／無聲音／かなり小声)

のうお主、いい顔をしておるだ♪

うむ、参道で出会った時とは、天と地程の差じや♪

(耳ふー) ふ～、ふ～、すう…ふ～、ふ～。

ふ～わ、ふ～わ、も～ふ、も～ふ。

ふ～わ、ふ～わ、も～ふ、も～ふ。

(耳ふー) ふ～～、ふ～～。

(耳ふー) ふつふ、すう…ふつふ…。

(位置右・距離近い／有聲音／かなり小声)

うむ、綺麗になつたぞ♪

では続けて反対側じやな。

お主、寝返りを打つてくれるか。

(聴き手が寝返りを打つ音)

(位置左・距離近い／有聲音／かなり小声)

うむ、じがいも綺麗にしてゆくんだ。

(じばらく耳かき音)

(浅い鼻呼吸音／時折短い呴く様な台詞)

す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。

(弱く息を吸う音) すう…。

じがいも中々…やり甲斐があつたうじやん。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。

(弱く息を吸う音) すう…。

「これは大物じやな……よしよし…。

す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。

(弱く息を吸う音) すう…。

うん?

んんつ…んんん…ふう…♪

す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。  
す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。

(「」まで)

(位置左・距離近い／有聲音／かなり小声)

のうお主よ、ワシは神通力を持つておる、わつ言つたじゃろ?

じゃからお主がなにに悩み、なにが心労の起因たるか、承知しておる。

じゃが敢えて「」で、話してはみぬか?

「葉に出し…誰ぞに出でる…。

やつある事で、気が晴れる事もある。

勿論話したくないなれば、そのまま黙しておつてもよい。

どうじや、試してみぬか?

そつかそつか、ならば聞「」。

### (相槌)

うむ……うむ…。

ほつ……つ～む…。

「むうむ…。

### (「」まで)

お世よ、よつ話してくれたの。

そして今日（こにけ）までよう耐えたの。

偉いぞ♪

じゃが、もう我慢せすともよい。

田下のしがらみは忘れ…今度はワシにすべてを委ねよ。  
構つものか。

ワシをなんじやと感づとな。

妖狐。

「」の世の者なうぢの存在、神の遣いじや。

人間…つまりお世一人の邪氣や穢れを受け入れ、祓う事など、容易い。  
ふふん、わづじや、お葉に甘えよ。  
では更に甘やかしてやう。

### (じばく耳かき音)

(浅い鼻呼吸音／時折短い呴く様な台詞)

す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～、す～ふ～。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。  
すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

(弱く息を吸う音) すう…。

ふむ……おお、豊作じや♪

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。  
すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

(弱く息を吸う音) すう…。

もう少し…もう…少し…よし…。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

(弱く息を吸う音) すう…。

これで最後かの…。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ、すゞふゞ。

(一ひまで)

(位置左・距離近い／有声音／かなり小声)

うむ、では一ひまで仕上げじや。

ふわふわもふもふしてゆくでの♪

ふゞわ、ふゞわ、もゞわ、もゞわ。

ふゞわ、ふゞわ、もゞわ、もゞわ。

(耳ふー) ふゞ、ふゞ。

ふゞわ、ふゞわ、もゞわ、もゞわ。

(耳ふー) ふつふー、ふー。

(弱く息を吸う音) すう…。

だらしない顔をしおつてがりこみ

ふふつ♪

ふーわ、ふーわ、もーか、もーか。  
ふーわ、ふーわ、もーか、もーか。

(耳ふー) ふつふー、ふつふー。

うむ。

これにて耳がせはしまつじや。

さて、次じやが…。

うん?

うむ、次じや。

まだまだ歪みを正してゆぐれ♪

お主、寝たままで構わぬが、仰向になつてくれるかの。

(体勢を仰向に動かす音)

#### 4：不思議な音色（神社の本殿／深夜）717文字

(位置正面・距離普通／有声音／かなり小声)

さて、次はの…あ～なんと言つたのよ…か…。

ふむ…お主、「音」の持つ力を知つておるか?

ねづじや、川の音…虫の音…様々な音があるの。

これらには少なからず、にかしうる力が備わつておる。うむ。

心を落ち着かせる音…。

心を高ぶらせる音…。

その効果は様々じゃ。

そ「」で今宵聞いたものは、「」ねじや。

ああ、お主からよく見えぬかもしけぬな。

(盛り塩を指でザワザワ鳴らす音)

「これで見えるかの?」

「これは、」の社で清めた塩。

それを器に入れ、持ち寄ったのじや。

ふふつ、「やつぱつ分からん」、ところた顔じやな♪  
まあ聞いておれ。

「」に、「」神木の落ち枝(おち枝)を削った棒を刺して…。  
(ザクザクサクサクとこゝ ASMR＼キネティックサンディ)

どつかの~。

ふふつ、子氣味よい音が、心地よこじやわい。

そうかそつか、なじばよこへ  
では続けの~。

ワシはしじめいく黙しておる。

存分に心地よい音色に醉ふ。

(じばらく左右に移動しながらのキネティックサンディの音)

(位置正面・距離普通／有声音／かなり小声)

(弱く息を吸う音) すう…。

ふふつ、効いておぬ効いておぬ。

音によゐ癒し、悔れんじや。

うむ、それはなによりじや。

じやがな、まだ続きがあつての。

むしろ「」からが本番じや。

器に入れた塩をもう一つ…。

お、察しがいこのつべ

うむ、両耳同時に奏でてやべ。

思考を空（から）にし、音だけに集中するのじや。

ほれ♪

(しづかく両耳同時のキネティックサンンドの音)

(位置正面・距離普通／有声音／かなり小声)

(弱く息を吸う音) すう…。

どうやら心の淀みも…随分と晴れてもた様じや…。

参道で見た顔とは大違ひじやぞ…。

表情が活き活けとしておむな…。

ふむ、お主も実感しておむなか…。

ふかっ…なりばよこ♪

どひづじや…まだ続けるか?

うむ、よかんつ…なりば大盤振舞じや♪

(しづかく両耳同時のキネティックサンンドの音)

(位置正面・距離普通／有声音／かなり小声)

(弱く息を吸う音) すう…。

さて、これくらいかの…。

なんじや、まだ足りぬか?

やつてやりたいのは山々じやが、夜（よ）も更けてもしておむ…。

これ以上の長居は邪氣や穢れに中（あ）てられやすい…。

わづじや、今のお主は打つて付けの的、とまづわけじや…。

じゃかうの、しまじじや…。

ほれ、起き上がり。

5：甘えてよごのじやぞ（神社の本殿／深夜）5,261文字

(位置正面・距離普通／有聲音／小声)

「お主、どうじゃつたかの？」

心労は癒えたか？

うん、なんじや。

物言いたげな顔をしおつて。

「いつみい。

(相槌) ふむ…ふむふむ…う～む…。

帰りとうない…か。

困ったのう…急に甘えん坊になつてからに」。  
ふむ…なれば今宵はワシの根城で寝てゆけ。  
なんじや、それ程までに浮かれる事かの?  
ふふつ、そうか。

そつと決まれば、ほれ、心穏やかな内に早よう寝るが。

(呆れた様に) なんじや、まだ用か?  
なに?」

添い寝…じやと?

それは互いに横になり、寄り添つて寝る、あの添い寝か?

(囁きかけて聴き手が抱き着いて来る) ふむ…ワシは構わぬが…お主…。

つー

(心音)

(位置左・距離近い／有聲音／かなり小声)

「おひ、なんじや憲につ。  
離さぬかつ。

はあ、このままじやと?

抱き着いたまま眠る…と囁つか?

やめい、「フシはお主の親でも想い人でもないのじゃぞ」。

(考え方込む様に)

う～む……参ったの…。

ん～…。

ふ～む…。

(「一直到」まで)

(ため息) はあ……。  
まあよこじやうひ…。

(「ワザとうしへ棒読みで／＼本当は嬉しい」)

はあつ、仕方がないのうつ。

今宵フシはつ、お主の物じやつ。

(「一直到」まで)

はあ、お母さん?

なぜれうなるつ。

フシは妖狐。

断じてお主のお母さんではな…。

ん…う～ん…ふむ…。

ふかっ、まあよい…。

お主のお母さんか…悪くはない♪

では坊(ぼつ)よ、寝るだ。

いつまでも「うしへおつては、眠れぬじやうへ  
横にならぬか。

離れたりせぬから、安心せい。

うん?

フシの声を聞いておりたい……じやう…  
よせ、照れるではないか。

ふむ、落ち着く…か。

まあよいじやないつ。

では「うしお」。

なにか一つ、話をしてもやるつ。

う～む…お、そうじや。

童（わらじ）と子狐の話…はどうかの？

うむ、ではうしおよいつ。

### 朗読パート

「童と子狐の登場人物」

童：遊んでいる間に森に迷い混んでしまった男の子

子狐：森で怪我をして動けなくなってしまった白狐の子

親狐：子狐の母親で妖狐

### （心音）

（位置左・距離近い／有聲音／かなり小声／絵本を読み聞かせる様に）

童と子狐。

「」はとある山中の森。

うつとうと茂る木々の中に、ポツンと一人、童がおつた。

童は一人で遊んでおる間（ま）に、森へ迷い込んでしまつた。

童「母上一つ、父上一つ。」

童は必死に叫んだ。

じゃが、返事があるはずもなく、童は途方に暮れておつた。  
それでも尚、童は呼び続けた。

童「誰が一つ、誰かおりませぬか一つ。」

やはり返事はなかつた。

童は段々と恐ろしくなり、寂しくなり、今にも泣き出しそうじやつた。  
するとその時、「」からともなく、声が聞こえた。

**子狐** 「「——」——。」

童は同じく森に迷い込んだ者がおると思い、辺りを見回した。

**童** 「おーい、誰かおるのか？」

童は声のしたであろう方角へ問いかけた。  
すると。

**子狐** 「「——」——。」

間違いない、誰か迷い込んだのじゃ。

そう思った童は、声のする方へと草木をかき分け、進んだ。  
少し行くと、草木が拓け、月明りがそれを照らしておった。  
そこにおつたのは、人間ではなく、白い毛に覆われた子狐じゃつた。  
童はピタリと足を止め、息を潜めた。

子狐がおる。

つまり近くに親狐がおる可能性が高いからじや。

子を守る親の警戒心は侮ってはならぬ。

童はそう教わつてゐた。

それが狐であろうと、獸は獸。

その場に緊張の糸がピンと張り、童は息を飲んだ。

先に口を開いたのは子狐じやつた。

**子狐** 「ああ、よかつた。誰か来ないものかと、ずっと待つていたよ。」

子狐は元氣のない声でしゃうづつと、伏せていた体を起つてした。

そしてゆいつぐりと童の方へと歩（ほ）を進めた。

すねどじりじりや。

子狐は後ろ足を弓きずつておるではないか。

童は思わず問うた。

**童** 「お前、怪我をしておるのか。」

すると子狐は弱々しい声で返した。

**子狐** 「お母様とはぐれていた所に、悪いカラスがやつてきりね。

それで足を痛めてしまった。情けない。」

よう見ると子狐の後ろ足は、赤く染まつておつた。

童は子狐に駆け寄り、他に怪我をしておらぬか見回した。

幸い、怪我をしておるのは後ろ足だけじゃつた。

童 「お前、今手当<sup>てあわせ</sup>をしてやるからな。」

そつ<sup>とつ</sup>と童は、着ていた着物をグイと引っ張り、破いた。

そして子狐の後ろ足に破いた着物を巻き付け、手当<sup>てあわせ</sup>を施した。

子狐は感心して、「う<sup>う</sup>」<sup>う</sup>。

**子狐** 「随分と手慣れて<sup>てなじんで</sup>るね。」

童は照れく<sup>べんざく</sup>に鼻の頭を擦ると、「う<sup>う</sup>」<sup>う</sup>。

童 「おいらには兄妹がたくさんおつてな。

皆元氣<sup>げんき</sup>はいいが、怪我も尽<sup>つく</sup>さぬ。

その度におこりが手当<sup>てあわせ</sup>しておるのだ。」

それを聞いた子狐は、なるほど、と納得して頷いた。

童はぱつぱつと手当<sup>てあわせ</sup>を済ませると、小さくよし、と息をつき、<sup>う</sup>。

童 「これで一先ず大丈夫。しかし傷口を清潔に保たねばならん。」

そつ<sup>とつ</sup>と童は辺りを見回し、ある一<sup>ひと</sup>点に田を止めた。

そしてそちらへ駆け寄り、生えて<sup>て</sup>る草を探ると、戻ってきた。

童 「これは解毒（げどく）効果のある草だ。」

そつ<sup>とつ</sup>と童は採つてきた草を手で揉み潰した。

そしてそれを子狐の後ろ足にあてがつたのじや。

すると子狐は痛<sup>いた</sup>の余り、悲痛に叫んだ。

**子狐** 「う<sup>う</sup>、いたたつ。」

痛がる子狐じやつたが、童は尚、採つてきた草をグイと押し当<sup>て</sup>た。

童 「う<sup>う</sup>して布に草の絞り汁を吸い込ませるのだ。我慢しておくれ。」

「うつ言う童の言葉を信じ、子狐は痛みに耐えたのじゃった。

しばらぐして、草を押さえていた手を緩めると、童は「うつ言うた。

「傷が熱を持つといけないが、これでもう大丈夫だらう。」

まだ少し痛みの残る傷口を見やると、子狐は童に礼を言うた。

「いやあ、ありがとう。もう駄目かと思っていたよ。」

童は照れくさそうに鼻の頭を擦ると、子狐を抱き上げた。

「こんな拓けた場所では、またいつ他の獸に襲われるか分からぬ。

安全な場所を探そう。」

それを聞いた子狐は、ピンと耳を立てて言つた。

「それなら」の先によい場所がある。

「誰も住んでおらぬ小屋があるんだ。」

そう言つと怪我をしていない前足で、小屋の方向を差したのじゃった。  
子狐の案内に従いしばらぐ進むと、確かにそこには小屋があった。

童は念のため、戸を叩いて呼びかけた。

童「誰かおりませぬか。」

返事はなく、また人の気配もなかつた。

童は慎重に戸に手をかけると、グイと力を込めた。

開け放たれた小屋には、誰もおらんかった。

童は慎重に歩（ほ）を進め、小屋へと足を踏み入れた。  
やはり人の気配はない。

小屋の中、外も確かめたが、誰もおらぬ。

童はようやく「ふう」と息をつき、その場に腰を下ろした。

童「どうやら本当に誰も住んでおらぬようだ。」

「床には埃。足跡もない。安全だ。」

そう言つと童は床の埃を払い、抱いていた子狐をそつと床へ放した。

子狐「ありがとう。人間の子。」

子狐はいつも「ぐう」と、出会った時の様に床へ伏せた。  
どうやら疲れ切っている様じやつた。

童も同じく「参った」という風に、床へ大の字に寝転がつた。

**童** 「しがじどうしたものか。」

童は今後の行く末について考えておつた。

童 「今晚はここで休むとして、問題はそのあとだ。

助けを呼ぼうにも、手立てが思い付かぬ。」

すると子狐はピクリと耳を動かし、童に言つた。

**子狐** 「きつとお母様が見つけて下さる。

人間の子、明日の朝まで辛抱できるかい?」

すると童はそれまで「疲れ切つた」という顔をしていたが、持ち直した。

**童** 「へえ、お前のお母様とやは鼻が利くのかい?」

童の問いに子狐は曖昧に答えた。

**子狐** 「うーん、その様なものかな。きつと見つけて下さるや。」

童は不思議とその言葉を信じたのじやつた。

なぜかは分からぬ。

じゃが、童は疲れ切つておつた。

溜まった疲労と安堵した今、急な眠気が訪れたのじや。

それに抗う術もなく、童は眠つてしまつた。

翌朝。

小屋には真っ白い毛並みの、大狐が佇んでおつた。

子狐はピクリと耳を立て、伏せていた身を起した。

**子狐** 「お母様だつ。」

すると、小屋の戸が自然と開(ひら)いたではないか。

そんな事が起こつてゐるともゆ知らず、童はぐつすり眠つておつた。

大狐は童の傍らへ歩み寄ると、童の頭をグイと押しやつた。

ようやく田を覚ました童は、田の前の光景に恐れおののいた。

見た事もない程、大きな狐であったからじゃ。

しかし童は一時（いっとき）の間（ま）の内に平静を取り戻した。

その大狐が、慈愛に満ちた、優しい田をしておつたからじゃ。

そして童は察した。

それに勘付いたのか、子狐が嬉しそうにこう言った。

**子狐** 「人間の子、もう安心だ。お母様が来て下さった。」

子狐は親狐（おやぎつね）に擦り寄ると、これまでの経緯を話した。それを聞き終える前に、親狐は子狐を制した。

**親狐** 「よしよし、承知しておる。」

親狐は童に向かうと、深々と頭を下げ、続けた。

**親狐** 「人間よ、世話になつたの。礼を言う。」

童は照れくさそうに鼻の頭を擦り、言つた。

**童** 「いやいや、大した事はしておりませぬ、お狐様。

傷も深くはありません故、『』安心を。」

すると親狐はもう一度頭を下げ、礼を言つた。

**親狐** 「人間よ、本当にありがとう。」

そして童の目を見据え、問うた。

**親狐** 「人間よ、森で迷うておる様じやの。

「ワシが出口まで案内してやる。ついて参れ。」

そう言うと親狐は子狐をひょいと咥え上げ、小屋を出た。

童は言われるまま、親狐を追つた。

すると不思議な事に、森の中に一本の道が現れたのじゃ。

童は不思議に思い、小首を傾げた。

それもそのはず。

その道はただただ真っ直ぐ続いておつたからじゃ。

はて、この様な道があつただろうか。

童はそう思つた矢先、どいかうともなく、親狐の声が聞こえた。

**親狐** 「人間よ。ワシは普通の狐ではない。

いわゆる妖狐と云つやつじや。

これは神通力を使つて話しかけておる。

じゃが化かしたりせぬから安心せい。」

童はおののきながらも頷いた。

親狐はそれを見て続けた。

**親狐** 「お主。なんぞ礼をしたいのじゃが、望はあるかの。」

童は首を横に振ると云つた。

故に礼には及びませぬ。」

それを聞き終えると、親狐は少し間（ま）を開けて返した。

**親狐** 「やはりな。お主はとても優しい子じゃ。

じゃが子を助けてもらつたのじゃ。

おじそれと帰しては、妖狐の名が廃（すた）る。」

それを聞き、童は考え込んだ。

そしてハツと妙案を思い付いた、という顔をしたのじゃ。

**童** 「ではお狐様。子狐と馴染みの仲になりとうござります。」

親狐は意外な申し出に、田を見開いて驚いた。

**親狐** 「お主は面白い奴じやの。

よからう、世話になつた我が子をよろしく頼むぞ。」

やつと親狐はひょいと子狐を持ち上げ、童の顔の前へ差し出した。  
そして嬉しそうにしてくる子狐が言った。

**子狐** 「人間の子、よろしく。名を千歳（ちとせ）といつ。」

童も嬉しそうに返した。

**童** 「お前と出会ったのもなにかの縁だ。

仲よくしよう、千歳。」

それからじばらぐ、童と子狐は楽しそうに話を続けたのじゃった。  
そして視界が拓け、森から出たと思ったその時じやつた。

なんと今来た道は、跡形もなく消え去ったのじゃ。

童は背後を振り返りポカンと口を開けておつた。

すると親狐がこいつ言った。

**親狐** 「化かさぬ、と言つたがすまぬの。

森を抜けるため、少しばかり力を使わせてもうつた。」

童は変わらず呆けた顔をしておつた。

次に子狐が自慢気にこいつ言った。

**子狐** 「お母様はとてもない力を持つておられる。

驚くのも無理はない。」

ようやく我に返つた童は、今起きたことを理解しようと努めた。  
が、理解で見るはずもなく、その努力は無駄に終わったのじゃつた。  
そしてとある事に気が付いた。

それは見慣れた景色であった。

なぜならば、童の家のすぐそばだったからじや。

**童** 「不思議なものだ。あれだけ迷っていたのが嘘か真（ま）いと）か。」

感心している童に、親狐が言った。

**親狐** 「ほれ人間よ、家族が心配しとるじやうつて。

早う顔を見せてやれ。」

それを聞いた童は、思い出したかの様に駆け出したのじゃつた。  
こうして童は無事に家族の下へと帰つた。

それからじぶんもの、童と子狐は、仲よく遊び、学び、育つた。  
そうして時を経る内に、ある契（あざつ）を交わしたのじゃつた。

それは千歳からの案じゃった。

子狐 「お主が困つた時、迷える時、頼つて欲しい。

」の山、あの森すべてが狐の根城になつておる。

お主が助けを求めるならば、必ずや馳せ参じる。

それはお主だけには限らぬ。

お主の家族、あるいは後世まで守ると誓おつ。」

童は驚いたという顔をして返した。

童 「千歳、そんな大層な事、おいらは望んでおらぬ。

おいらはお前と仲よく過ぐせたり、それで満足だ。」

すれど千歳は首を横に振り、言つた。

子狐 「いいや、命を救つてもひつたのだ。

それ相応の対価を払わせておくれ。」

童は一時（いっとき）困惑したが、すぐに笑顔になり言つた。

童 「えうか。お前の申し出なら断れぬな。」

童は照れくさうに鼻の頭を擦り、千歳の頭を撫でた。

千歳は嬉しそうに尾を大きく振つた。

童と子狐は強い絆で結ばれておつた。

その縁は末永く続いたそうな。

おしまい。

（朗読終わり）

（少しだけ通常台詞）

（位置左・距離近い／有聲音／かなり小声／語りかける様に）  
のうお主…。

ふむ…寝てしまつたか…。

お主の先祖には誠、感謝しておる…。

お主が「こ」を訪れたのも…代々言つてばかりたからじやない…。

困つた時、迷える時は「こ」へ来い…と。

今日（ここに）までも本によつ頑張つたの…。

じゃが無理はずのな…。

我慢もするな…。

あの時のように…身を寄せ合つて眠れ…。

今度はワシが、お主を「かね」番じや…。

じゃから安心して眠るがよ…。